

つくろう 伸ばそう 鹿沼の文化

かぬま文化

No.168

発行人 鹿沼市文化協会
発行責任者 会長 鈴木 貢
編集委員会 委員長 黒川 榮三
印刷所 晃南印刷株式会社

ピンチをチャンスに 『つくろう鹿沼の文化』

鹿沼市文化協会会長 鈴木 貢



会員は、賛助会員を含めて636名、初代会長に福島充氏を選出して発足しました。福島会長は、8期16年務められました。

会員の皆様には、日頃から鹿沼市文化協会の活動に参加、協力をいただきまして誠にありがとうございます。

さて、私、このたびの通常総会におきまして会長に選出されました。

新型コロナウイルス感染症防止のため今回の総会は、文化協会の歴史の中でも初めての書面議決となりました。

鹿沼市文化協会は、昭和51(1976)年7月18日、鹿沼市産業文化会館において市民文化の交流と推進を図るため設立されました。

初代会長 福島 充 (昭和51年)
2代会長 愛波 正雄 (平成4年)
3代会長 阿部 勝 (平成12年)
4代会長 柳田 芳男 (平成14年)
5代会長 入江 正永 (平成20年)
6代会長 山菅 昭八 (平成26年)

文化協会は、『つくろう 伸ばそう 鹿沼の文化』を指針に活動が始まりました。

また、鹿沼市民文化祭は、市の主催事業で始まりましたが、文化協会は実行委員会の中で、企画から運営を担ってきました。昭和59(1984)年、本格的な文化の殿堂として、鹿沼市民文化センターが設置され、第6回鹿沼市民文化祭が市民文化センターを中心として開催されました。経済の高度成長期と重なるように、鹿沼市の文化・芸術は質的にも量的にも拡大しました。結成から43年経ち、会員463名、賛助会員37名で、各団体の独自の活動と文化協会と連携して活動を推進してきました。

結成時から今日の課題は、「部門、団体を越えた交流」「会員の高齢化・減少」「新会員や若い人の参加」等々の活性化に向けた活動をどう展開していくか等々についてです。

このような状況の中で、新型コロナウイルスによる感染が始まり、感染拡大を防ぐために社会的・人的接触距離の確保として、「ソーシャルディスタ

ンス」という考え方が提唱されています。

具体的には、密閉・密集・密接の「3密」を避けることが求められています。

感染拡大を予防する新しい生活様式や習慣が求められることにより、衣食住の生活をはじめとして、文化・芸術の活動においても変革をしていくことになるでしょう。

これまでも社会や経済の変化によって、地域社会における人と人の関係は希薄化し、人と人の距離は拡大していく状況にありました。

このような時こそ文化・芸術を推進する活動を通して、人と人との信頼を回復し、生き甲斐を感じる社会を構築していくことが最重要であると推測されます。

コロナウィルスの終息、生活習慣の変化など、まだまだ予測が難しい状況が続くことが想定されます。

令和2年度表彰者	1
令和2年度総会承認事項	2
かぬま川柳会	3
第42回鹿沼市民文化祭の中止について	3

令和2年度表彰者

文化・芸術活動の継続と発展に向けて、困難な環境を跳ね返す「ピンチをチャンスに変える」発想を共有していくことが大切であると考えています。

各団体と文化協会の連携を身の丈に合わせつつ『つくろう 伸ばそう 鹿沼の文化』を合言葉に活動を進めていきたいと存じます。

会員の皆様のご健康と益々のご活躍を心からお祈りいたします。

《令和2年度表彰者》
中津 光夫氏
(鹿沼吟詠剣詩舞会)
廣田ミチ子氏
(鹿沼民謡民舞連合会・民謡ひろた会)

役員紹介

今回のコロナ禍によって、通常総会は「書面議決」となりましたが、会員の皆様から承認を受けて、新会長に鈴木貢氏が選出されました。新執行部は次の通り(副会長は順不同)

会長 鈴木 貢
副会長 高橋 進

青木 宗栄
神永 雄一
沼尾富士子
板橋 和子



令和2年度総会提出議案が承認

本年度は、コロナ禍により通常総会を書面による議決としました。

提出した議案は、すべて賛成多数により承認をいただいたことを報告し、ここに掲載いたします。

- 1 集計年月日 令和2年5月25日
 2 入会団体等数 67団体等
 3 回答団体等数 36団体等(会長委任31団体等)

議案	結果	賛成	反対	無効
第1号議案 令和元年度事業報告について	可決	67 (内、会長委任31)	0	0
第2号議案 令和元年度決算報告について	可決	67 (内、会長委任31)	0	0
第3号議案 令和2年度事業計画(案)について	可決	67 (内、会長委任31)	0	0
第4号議案 令和2年度収支予算(案)について	可決	67 (内、会長委任31)	0	0
第5号議案 役員等の改選について	可決	65 (内、会長委任31)	1	1

令和元年度事業報告

(1) 会議の開催について

・総会、理事会(5回)、正副会長会議(5回)、会計監査、表彰者推薦委員会、役員等選考委員会(2回)、視察研修推進委員会(2回)、新年会運営委員会、編集委員会(8回)

(2) 事業の実施について

① 主催事業

・茶会、視察研修、文化セミナー、新年会

② 共催事業

・栃木県芸術祭(茶華道展・演劇祭・民謡民舞大会)・ふるさとめぐり(鹿沼史談会事業)

③ 後援事業

・第41回市民文化祭(23部門)・歌謡大会・美術展・書道展・川柳大会の後援

④ 広報紙等の発行

・「かぬま文化年報」第42号、「かぬま文化」第165号・第167号

⑤ その他

・栃木県文化協会通常総会、文化協会会長会議、栃木県文化振興大会への参加、ホームページの作成

令和元年度 決算書

●収入総額 1,858,278円
 ●支出総額 1,474,197円
 ●差引残高 384,081円

自 平成31年4月1日
 至 令和2年3月31日

収入の部

科目	予算額(A)	決算額(B)	増減(B-A)	備考
1 会費	1,100,000	972,000	△128,000	
2 補助金	579,000	579,000	0	
3 前年度繰越金	270,322	270,322	0	
4 雑収入金	30,678	36,956	6,278	
合 計	1,980,000	1,858,278	△121,722	

単位:円

支出の部

科目	予算額(A)	決算額(B)	増減(B-A)	備考
1 運営費	51,000	34,320	16,680	
2 事務費	350,000	242,801	107,199	
3 事業費	1,304,000	1,143,562	160,438	
4 団体費負担金	35,000	35,000	0	
5 諸費	80,000	18,514	61,486	
6 予備費	100,000	0	100,000	
7 文化セミナー費	50,000	0	50,000	
8 文化セミナー引当繰越金	10,000	0	10,000	
合 計	1,980,000	1,474,197	505,803	

単位:円

令和2年度事業計画
※令和2年度重点事業

当協会の活性化を促進するために、会員自ら活動を展開して、芸術・芸能等文化の振興を広く市民に呼びかけ、参加と協力を求めよう。

(1) 会議

・会則に基づく総会、理事会、常任理事会、その他の会議の開催

・会報「かぬま文化」の作成や、会員の連携を深めるための部門別部会の開催

・表彰規程による表彰者推薦委員会の開催

・主催並びに協賛事業を行うための企画委員会及び事業部会の開催

(2) 主催事業

・文化協会新年会の開催、並びに顕彰者の披露

・会報「かぬま文化」の発行(年3回)

・かぬま文化年報の発行(年1回)

・会員の親睦と茶華道普及のための茶会の開催

・当協会の活性化と教養を深めるための県内外への文化の視察研修の実施

・第12回文化セミナーの開催

・その他事業の開催

(3) 受託事業及び共催、後援

・第42回鹿沼市民文化祭(主催・鹿沼市、市民文化祭実行委員会)

・鹿沼史談会との共催

・会員の事業の後援

・美術展覧会

(4) 参加事業

・栃木県文化振興大会(令和3年1月30日、足利市文化会館)

(5) その他

・認知度を向上させるための情報発信の推進

昨年某月某日、懸案だった目的地へ一路。宇都宮・鶴田町。同地内の羽



埋もれた本県の「川柳遺産」発見 宇都宮の民家に川柳奉納額

かぬま川柳会 白石 洋

黒山公園の麓に「豪農の館」小松家がある。かつて付近一体の地主さんだった。

長屋門をくぐって訪問を告げると、家人から「どうぞご自由に」とのこと。で、広い庭の奥の小高い築山に登る。その頂上に

令和2年度 収支予算書

●収入総額 1,976,000円 自 令和2年4月 1日
●支出総額 1,976,000円 至 令和3年3月31日

収入の部					単位:円
科 目	前年度予算額	本年度予算額	増 減	備 考	
1 会費	1,100,000	990,000	△110,000		
2 補助金	579,000	579,000	0		
3 前年度繰越金	270,322	384,081	113,759		
4 雑収入金	30,678	22,919	△7,759		
合 計	1,980,000	1,976,000	△4,000		
支出の部					単位:円
科 目	前年度予算額	本年度予算額	増 減	備 考	
1 運営費	51,000	46,000	△5,000		
2 事務費	350,000	270,000	△80,000		
3 事業費	1,304,000	1,415,000	111,000		
4 団体費負担金	35,000	35,000	0		
5 諸費	80,000	50,000	△30,000		
6 予備費	100,000	50,000	△50,000		
7 文化セミナー費	50,000	100,000	50,000		
8 文化セミナー引当繰越金	10,000	10,000	0		
合 計	1,980,000	1,976,000	△4,000		

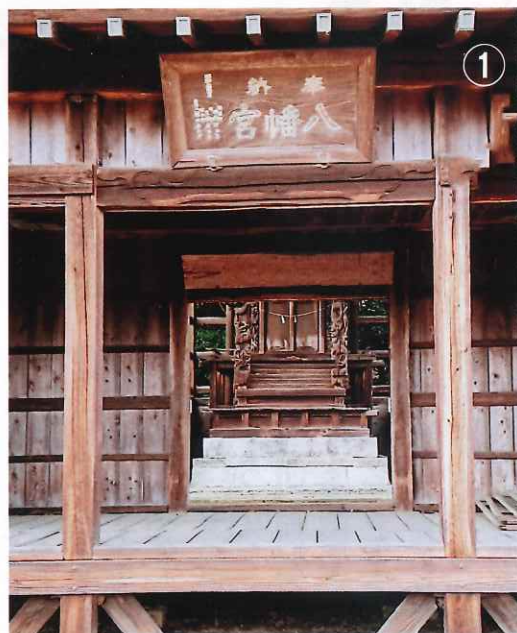
めざす八幡宮が鎮座（写真①参照）。

さっそく木組みの舞台上がって本殿に向かい参拝する。その社の正面に目的の扁額が（写真②参照）。

下野川柳会会員の「川柳奉納額」である。掲額の日付は54年前の昭和41年。

当時の会員の名と川柳作品がずらり。読み取れる範囲でお名前を挙げる

と：荒井宗明、川俣喜猿、青木げん坊、古田鶯村氏ら。同会の会長経験者であり、いずれも前田雀郎門下の高弟で、栃木県川



柳界の大先達の皆さんである。かぬま川柳会現会員の篠田東星さんのご母堂の東（あづま）さんの名も。

この方々のうち、こんにちご存命の方は、数年前まで下野新聞の川柳欄の選者をつとめられた荒井宗明先生御一人である。掲額の経緯は、よくわからないうが、全体的に風化が進行し、判読に苦労した。

この扁額に刻まれた栃木県川柳史の一コマを今に伝える貴重なモニユメントがこのままでは、数年のうちに朽ち果ててしまふのではないか。このような邸内に神社を祀る例は、今では珍しいが、少なくとも狭い庭内では無理だな、まして「ウサギ小屋」では。と帰路つくづく感じ入った次第。（了）

第42回（令和2年度） 鹿沼市民文化祭の 中止について

令和2年6月11日に開催した鹿沼市民文化祭実行委員会において、本年度の鹿沼市民文化祭の開催について協議した結果、今後も新型コロナウイルスの感染の状況が見通せない中、参加者、入場者の安全第一を考え開催の中止を決定いたしました。

このような判断になったことは、実行委員会としても非常に残念ですが、安心安全を最優先に考えての決定であることをご理解いただきますようお願い申し上げます。来年度の開催に向けてより一層のご支援を賜りますようお願いいたします。





待望のホームページの開設

鹿沼市文化協会 検索

<http://www.bc9.jp/~bunkakyokai>

宇都宮大学地域デザイン科学部による「地域プロジェクト演習」で文化協会の課題について取り組んでいたことができました。その提案の中で文化協会の認知度を上げるための方策として情報発信が必要不可欠であるとの提言を受け、「ホームページ」を作成しました。ぜひご覧いただき、ご意見をお寄せください。

編集後記にかえて―「新編集委員長となつて」

会報168号は、本来なら新年度の事業計画や予算に加え、各団体の活動や活躍する姿を伝える内容にする予定でした。しかし、残念ながら変更を余儀なくされました。世界を席巻する新型コロナウイルス禍は6月末現在、地域によって終結の見通しさえ見えてこない国があるほどで、今後も各方面に甚大な影響を与えるのが必至の情勢となってきたからです。

お分かりのように、今夏までの国内のコロナ禍の推移は、本会の定時総会さえ開ける状況になく、大切な内容を書面議決したほど。各団体も事情は同じで、自粛ムードの中、身動きが取れない状況に陥った仲間も多かったと聞きます。

この現状を踏まえ、例年だと「かぬま文化年報」を発刊する時期ですが、年報と会報とも日程の再考を迫られ、結局、会報を大幅に見直し、変則的な紙面編成で先行させる

道を選びました。事情をご理解の上、ご了承ください。年報第43号は9月ごろの発刊を予定しています。

会報は令和2年度の総会議案（元年度事業報告、同決算、2年度事業計画、同予算）と役員改選の結果等を取り上げ、鈴木貢新会長の挨拶、白石洋さん（かぬま川柳会）投稿の「埋もれた本県の『川柳遺産』」を見を載せました。

さて、肝心な新型コロナウイルスですが、感染の拡大を防ぐ必要性は理解しているつもりです。だけど小規模な会議でも、何となく周囲に気兼ねしながら開かざるを得ない気持ちになる。規制の制限緩和に伴い、役員だけでも会合を開いて今後の運営などを話し合おうとしても、いわゆる「3密」が気になるし、自粛ムードが広がっているためか、会議に身が入らない時も確かにある。

マスクの着用や手洗い、消毒、換気の徹底励行に加え、社会的距離の保持

や大きな声の禁止を求める空気が漂う。そんな社会的要請が強まるのか、そう感じるかは別にして、コロナ禍後の新生活様式、新日常の社会が既に始まったと見るべきかもしれない。見えないものへの恐怖なのか、市民の日常生活に、コロナ禍が不気味な影を落とし始めた。そう言ったら過ぎるだろうか。筆者にはそう映るという独り言です。

さらに最近の新聞報道によると、感染当初の政府の見通しの甘さや後手に回った対策とか、経済優先の施策と、それにまつわる運用の混乱などが市民の不安に拍車を掛けた、と分析する識者もいるようです。

その後の国内を見ても、「禍を転じて福となす」状況にあるか。休業の急増に加え、企業の人減らしや賃金の引き下げ、新規雇用の減少など、労働環境の悪化が見え始めた指摘する専門家も多い。経済指標の低下や景気の落ち込みが確実視されるだけに、国民の

不安感は募る一方だろう。

この傾向が企業間や地域間の格差に広がると、格差社会の拡大につながるかねない。経済活動の緩和が時代や社会の後退を引き起こす要因の一つにならないだろうか。その意味でコロナ禍対応の真の正念場は、これから確実にやって来ると見るべきでしょう。

ところで、今回、編集委員長の大役を仰せ付かり、驚くと同時に、「こんな緊急事態時になぜ」と正直戸惑っています。新人同然の身には、肩の荷が重過ぎて平常心ではいられません。

難役を担う事実だけでも身が引き締まるのに、共生を強いられる新型コロナ時代への対応など、課題山積の状況は、今後とも変わるとは思えません。ただ、重責を全うするためにも、各団体とその構成員、先輩諸賢、編集委員の皆さんの指導と協力が何より必要だと考えています。その事実だけは

今から公言できます。

ウイルスは生物として人類よりはるかに先輩だという。新型コロナと共生しながら静かな日常生活、新時代の生き方を模索する。かつて我々の祖先がそうしたように。生き残って未来を切り拓くには当面、感染の更なる拡大防止に全力を挙げ、早期に事態を収拾する以外に手はない。ここ当分、コロナ問題を考えながらの日々が続きそうです。

（黒川 榮三）

◇編集委員会◇



小林 夏江 寺崎 昌子 板橋 和子 黒川 榮三